

解説

『渡邊清次郎回想録』について(後編)



元練習帆船日本丸船長  
元東京商船大学教授

橋本 進

〔前編のあらすじ〕

幕府天領の塩飽諸島・本島泊浦とまりうらで生まれた渡邊清次郎は文久元年(1861)5月、14歳のとき幕府軍艦に乗るため江戸に向かい横浜で千秋丸に乗船した。千秋丸では小笠原島に航海、慶應2年(1866)2月に下船して海軍操練所に入所した。翌慶應3年5月、和蘭より回航の開陽丸に乗り組んだ。同年10月には兵庫に向かい薩摩藩春日丸と阿波沖で戦った。

〔原文〕

明治元戊辰年正月七日午前四時頃米国の「ガソポート」より「ボート」が一隻開陽丸に來た。其の船には外国奉行山口駿河守が乗込んで居られ、軍艦奉行か又は軍艦頭がしすなわら即艦長に面會がしたいと申されたので、副長澤太郎左衛門甲板に出て來て其の用向を尋ねられました。すると高貴の御方はじめ八名の方々が米艦に居られる

から、早く此の船におつれ申上あしあぐる様にとの事であつた。で副長は直ちに仕度をなし「ボート」三隻と儀仗兵ぎじやうを用意し、自身御迎へに行かれ御同道して歸艦されたのであつた。其の時千石積とも覺おぼはしき日本商船一隻が開陽丸に横付けされて居ました。此は御側用人室賀伊豫守むろがいのかみと奥向の女中の方々が乗つて來たのでした。

それから上様の御希望であるから直ぐ船を江戸に向けて出す様にとの事が有りましたが假令將軍が乗込まれても船將が不在でありますから勝手に船を動かすと云ふ事は出来ませんと云ふ事で御斷り致した様です。それに何か艦將、副長の間に打合せがありましたので、艦將の歸艦まで猶豫ゆうゐを願ふと申上げたのですが御聞入ありませんでした。そこで澤副長に江戸へ航海中、船將代理を申し付けるとの命令が下りました。それでも出来ませんとは申されませんから、是非なく出帆の用意に取掛りまして蒸氣をあげま

した。其の時英國の軍艦が戦争準備の形にて、開陽丸の近くに錨を入れ、程なく錨を揚げて、動き始めました。そして開陽の附近を二三回めぐり、頻りに操練を始めました。全くの示威運動であつた。開陽丸はそんな事は平氣でした。丁度其の時かと存じますが上様よりの御沙汰で本艦の戦争操練を爲すべしとの命令が下りました。副長の命令にて直ちに夫々受持ちの位置に付きました。

そして僅か二分間にて準備が整ひ操練を始めました頃、將軍慶喜公會津桑名の兩候其他老中方にも目もはなさず見分けんぶんされました。將軍より操練は如何にも能く揃ひ、又迅速なるには大に満足であつたとの御沙汰がありました。

開陽丸はそのまゝ、進行しまして正月八日大阪灣を出で、紀州沖を通過し、其の南の端潮はしの岬より、大島沖を五六海里も過ぎたる時、西北の風、俗に尾張おみだしの吹出と云ふ大風おつに逢あひました。

ところが段々風ははげしくなつて参りまして、蒸氣を強めましても船體が動搖するので船は仲々進みません。止むを得ず蒸氣力を止めて帆前斗りとしました。すると一時間に十六海里位の速力が出て盛んに走ります。十日の午前四時頃には八丈島の北五六海里の所にまゐりますと、全く風はなぎました。夫れより方向を相模灘にとりましたから午後の六時四十分頃洲の崎をかはして浦賀港に無事投錨致しました。(浦賀に入港したのは、何か特別の御用があつたださうでした)

此の時上様より貳分金で金貳百兩を澤船將代りに賜はつて、水夫頭古川庄八以下に格別骨折の褒美として下さつたのであります。翌十一日明け方浦賀を出帆しまして、午後七時少々過品川沖に着き直ちに錨を入れました。

上様にはすぐ開陽丸の「ボート」にて板倉伊賀守のお供にて御濱御殿へ上陸になった。會津桑名兩侯を始め其の方々は、漁船を雇つて開陽丸を下り上陸されました。

### 【解説】

〔ガンボート〕…砲艦

〔儀仗兵〕…儀礼・警備のための兵隊

〔御側用人〕…御側衆(將軍の次室に宿直し、老中)

中に代わつて夜間の諸務を決済・上達する)を監督し、將軍の命令を老中に伝え、老中、

若年寄の上申を將軍に取り次ぎ、評定所にも列する譜代大名。格式は老中に準じ、その権勢は老中を凌いだ。

〔奥向の女中〕…居間・台所の仕事に携わる女中。

〔貳分金〕…1兩の2分の1、2枚で小判1枚

〔御濱御殿〕…承応3年(1654)徳川綱重が

別邸を営み、その子綱豊が6代將軍家宣となつたとき、その別邸は浜御殿と呼ばれ、將軍家唯一の別邸となる。現在の浜離宮庭園である。

### 【原文】

艦將榎本和泉守は、大阪表より攝津に歸つて天保山に上り海上を見たところ風は強く波は高くして尋常の船は通ふ事が出来ない有様です。望遠鏡で開陽丸の全く江戸表へ向けて進行したのを知つて、上様にも御無事に帆出されたと大に安堵して山を下り、伏見鳥羽の景況を視察し負傷者は之を軍艦に送る手配をなし、又は陸軍兵士の来るのを種々助け、彼是心配をされ、十二日の朝漸く富士山艦に歸艦せられ、望月艦長より開陽丸出帆の模様を聞き取り、其他の各艦と共に其日出帆して、十四日午後品川沖に投錨したのであります。

榎本艦將は其日すぐ開陽丸に乗込まれました。將軍家江戸城に歸りましたが市中にいろいろの取沙汰起り、段々騒がしくなつて來たの

で、各艦よりの上陸もみなお濱御殿へのみ來り、丁度海軍根拠地の様でありました。用心の爲め各艦より番兵を交代に上陸させ此の處を守らせました。石炭を始め必要な物品は茲に貯蔵し夫々へ渡す事になつた。一時は重だちたる方々の中には家族を御殿内にある長屋へ住はせた向きも有りました。

市内には色々の出來事が起つて商家などは非常にビクビクする様になりました。

慶喜公が將軍の職を返上になつたと云ふので市中は大變な騒ぎとなりまして、官軍は追々入込み來り、一寸無政府の形となつてしまつたのです。

浪人者や又は不正な組々をこしらへて金の有りそうな商店に日中大威張で入り込み、軍用金を出せの何だのと談判をなし、若し断らうものなら「ダンピラ」を抜いて斬殺すとおどかすので、どこでも何程かを出してあやまると云う有様だ。之を押込みと稱へ體の良い強盜でした。

慶喜公の將軍職返上には、いづれも大不平で遂に上野の宮様を御守護申上げ、官軍を打ち佛ふと云ふ目的で、彰義隊と稱へて幕臣が次第に上野の山へ集つて來ました。そこで頻りに示威運動をなす様になりました。

其後結果は市内に於て官軍との些細の行違ひからあちらこちらに切合が起つたのです。官軍は肩に金切を付けて居ますから、直ぐ判ります。

そこで右の騒動が始まったのです。錢湯だとか、すれ違ひにどこがあたつたとか誠につまらない事が原因です。官軍の方でも餘り亂暴なのでとうとう我慢が出来なくなり、五月十五日總攻撃に着手したのでしたが夕刻には彰義隊は大敗軍となりチリチリバラバラ奥州の方へ敗走しました。

【解説】

【ダンビラ】…段平とも、刀のこと。

【將軍職返上】…將軍職は、慶長8年（1603）

徳川家康が征夷大將軍に任じられ、慶應3年

（1867）15代將軍徳川慶喜が大政を奉還

（將軍職返上）するまで265年続いた。

【金切】…錦切れ、にしきの切れはし、（肩に付

けて目印としたからいう）明治維新当時の官

軍兵士の稱。

【錢湯】…料金を取って入浴させる公衆浴場。

【彰義隊】…慶應4年（1868）2月23日、徳

川慶喜側近の渋沢喜作を頭取、天野八郎を副

頭取として、慶喜の護衛と江戸市中の警衛を

名目に結成され、旧幕臣を中心に牢人も加わ

り隊員は3千人にのぼった。5月15日大村益

次郎の新政府軍の一斉攻撃を受けて壊滅した。

【原文】

私は全月十七日上陸し、商人に變装して、上

野の山門の處まで行つた。精養軒あたりの山内と、今の世界料理店のあたりは一面大溝で、この溝の中ばかりでも死人が九名も居り、又山内には親子らしい者が切腹して居るのを見た。種々の死体を見たが、其員を數へて見たら其處ばかりでも八十三名だつたと記憶してゐる。

この後海上へも陸と同じく朝令が降り、慶應三年に、岩田平作氏が米國より回航してきた處の原名「ストーンウオルジャクソン」甲鐵艦並に富士山、朝陽の兩艦が朝廷に返納され開陽丸、回天丸、蟠龍丸、千代田形の諸艦は返納されなかつた。

註 この千代田形艦は我が邦では始めて建造されたもので外国人の手は全く借りなかつたものである。此の時の主任として肥田濱五郎と云ふ人があつた。この人は江川組の人で後には函館に行かずに横須賀造船所長となられた。

此の千代田形を造るにあたり、船體建造の方を司つた人は鈴木長吉と云ひ伊豆國河津の人である。この鈴木氏並に遠く開陽丸を注文に行つた上田寅吉氏の兩人は當時西洋型造船方法を研究した人である。

明治元年戊辰八月十九日我々は品川灣を後にして函館に向かつた。開陽丸は美加保丸を回天丸は威臨丸を長鯨丸は千代田形を曳き、その外「蟠龍」「神速」を加へ八隻で品川を出帆した。

註 威臨丸は先年米國或は小笠原島等へ行き大功績を

現した船であつたが、時世には勝てず老船となつたもので「エンジン」お取除風帆船として引かれて行つたものである。前述の石川政太郎氏はこの威臨丸の盛なりし時米國へ行つて来たことがある。

丁度此の頃二百十日に近く時化時であつて十九日の夜から北東の暴風雨となり、遂に曳船としていた美加保丸との曳繩も切れ「マスト」も折れ、又開陽の舵も折れて航行自由ならず、浪間に漂ふこと四日間漸く風も風ぎたので兩舷側にある「バックスヒール」英語では「スイギングブーム」をつきだし、其の先に繩で大きな空樽をしばり付けこれで船の左右を加減して、仙臺の東名灣まで辿り着いた。

【解説】

「精養軒あたり」…上野精養軒は明治9年（1876）に現在の上野山中に開業した。

後刻、上野戦争を想起しての記述であろう。

【ストーンウオルジャクソン】…木製・装甲、双

内車（ツイン・スクリュー）船1200馬力、

2櫓ブリック、排水量1358トン。

1864年（元治元年）アメリカ南北戦争中、

南軍がフランスに注文し、ボルド市で建造さ

れた。1867年（慶應3年）徳川幕府はこ

れを買収し、同年5月横浜に回航したが、ア

メリカが局外中立を宣言して引き渡しを拒ん

だ。奥羽平定後の明治4年12月、新政府が買



取し東艦と改称した。

〔千代田形〕…木造内車（スクリュー）船、60馬力1基、2橋トップスルスクリュー、排水量138トン。文久2年（1862）5月江戸石川島において建造に着手、慶應2年（1866）5月完成、起工から竣工まで5年を要した。徳川幕府建造最後の軍艦、すべて日本製である。

〔美加保丸〕…木造3橋バーク、800トン。原名ブランデンボルグ、1865年（慶應元年）プロシアで建造され、長崎で購入した。榎本艦隊に属し蝦夷地に向かう途中、触礁破壊した。

〔回天丸〕…木造外車船400馬力、3橋トップスルスクリュー、排水量1678トン。原名イーグル、1855年（安政2年）プロシアのダンジックで建造され、慶應2年（1866）長崎でアメリカ人ウォリスより購入。榎本艦隊に属し箱館海戦の折、東艦の弾丸が命中して機関を損傷、因って浅瀬に乗り上げ乗員は艦を去った。新政府軍はこれを焼いた。

〔長鯨丸〕…鉄製外車汽船、300馬力、996トン。原名ダンバートン（ドムバルトン）1864年（元治元年）イギリスのグラスゴーで製造、慶應2年（1866年）横浜で購入。旧幕府艦隊に属し蝦夷地に向かい函館戦争に参加したが、明治2年5月新政府に拿捕され

た。

〔二十十日〕…立春から数えて210日目。9月1日ころ。台風襲来の時期に当たる。

〔スイングブーム〕…スイングブーム（繫船桁 swinging boom）のことで、錨泊中両舷側から真横に出す長い円材で、ボートなどを繋ぐもの。航海中は舷側に沿って納められる。開陽丸は舵を損傷し、応急操舵のため両舷に繫船桁を張り出し、樽を使ったのである。

### 〔原文〕

そこで新しい舵を造りたいと思ひ仙臺藩の神木の樗の一枚板で造らうと苦心したのだが、とうとう出来上らない内に先を急いだため、箱の中に鐵の「バラスト」を入れたもので假の舵を造り、漸く北海道の鷲木村まで行くことが出来たのである。

註 此處は室蘭の先で丁度函館の裏側の處である。

回天と蟠龍は既に函館に着いて居り、開陽の目的地も函館なのであるが、何しろ不完全な舵で航行するのであるから思ふやうに船を操縦することは迎も困難であつた。それから直ぐ其の日に函館に着き、舵を本船に取り付けるには艦を陸にあげなければ出来ぬ故直ぐ又其儘出帆して江差に廻り沖より松前城を攻撃して落城させ江差へ入港した。榎本、澤の正副艦長も上陸し

たが私は船に残つた。

此の邊の舊の十一月頃はとても風波が荒く、殊に此港内の錨場所は底が岩で錨が落着かないのが常で不安心なのだが、折よく南風が吹いてゐて荒れる様子もなかつたので、皆が安心して上陸したものであつた。然し此の頃の南風はすぐ北西風に變るところで、風が出る前に浪が高くなり、丁度此の時もその状態で歸船するのに困つたものであつた。その時は出帆しやうと思つても大事な「スチーム」は三十六、七ポンド位より出来て居らず、全く致し方がなかつた。又追々大風大浪が寄せて来て益々激しくなるばかりであつたが、それでも無理をして出帆した。「スチーム」は不足なれ共錨を揚げた。大浪のために船が横になる頃は「スチーム」が充分出来たが、今度は船體が真中から折れて終ひ、漸くそれから三日目に海陸相通ずることが出来た。考へて見ると全く惜しいことをしたものである。今思ふと大變な失策をやつたもので、全く恐縮してゐるしだいである。

### 〔解説〕

〔バラスト〕…舵に似た箱の中に浮沈のバランスを取るために入れた鉄の錘をいう。この箱を假舵として航海した。

〔原文〕

室蘭へ第二回天丸（アシユロツト）に乗組出張されたる役々人名左の如し。

開拓奉行 澤 太郎左衛門

同 支配組頭 樋野惠太郎 雜賀孫六郎

同 調役並 松野勇次郎 關規矩守

同 定役 佐藤鹿之助 瀧本清次

新井所右衛門

同 書記役 舟橋力太郎 片岡初太郎

同 同心 石井千太郎 木下大三郎

下里辰之助 野村彌太郎

田村政太郎 山片安太郎

開拓頭並 根津勢吉（後回天乗組となる）

同 頭取 上原七郎 木村宗藏

開拓方 鈴木清三郎

同 並 上田寅吉 大澤久平

田所平左衛門 近藤庫三郎

乙骨兼三 小林彌三郎

榎本玄郷 小花萬次

松平良之丞 喰代定次郎

稻生英三郎 宇佐実重松

野村金一 飯田豊之助

同 見習 能勢甚三郎 島田鏘之助

開拓方小人取締 山中九八郎 渡邊清次郎

山田清左衛門

同 小人 六十參人

（是は開陽丸乗組の水夫なり）

其他

〔解説〕

〔第二回天丸（アシユロツト）〕…木造内車（スクリュー）船、3檣シップ、原名「アジロツト」。秋田藩の軍艦「高雄」、明治元年（1868）10月28日、箱館において捕獲し第二回天丸と呼んだ。後、宮古沖で新政府軍の軍艦に追われ、宮古北方の羅賀浜に乗り上げ、自焼して南部藩に降伏。フランス人を含む乗組員（71名とも95名とも）は東京に護送された。

〔渡邊清次郎〕…開拓方小人取締として第二回天丸（高雄丸）に乗船し室蘭に向かう。小人とは小者（身分の低い使用人）のこと。

〔原文〕

それより乗組員の内、後片附のため少しだけを残してあと全部五稜郭に引き揚げて終ひ、私は副艦長の澤太郎左衛門氏が開拓奉行となられたので小人取締役となり、百二十名を連れて室蘭港へ行き南部陣屋を改良して砲臺を造り、これが出来上つたので澤氏の書状を持ち馬で「アイヌ」を案内人にして函館へ行つたのである。この頃の陣屋には味噌は仙臺から澤山積み込んで来たので不自由しなかつた、醬油は少しもなく仕方がないので味噌を水煮して上汁を取り

醬油代りに使つたものだ。

私は少々北海道辨が出来て重寶だったので醬油其の他のものを買ふために金貳百兩を持ち、又澤氏より榎本氏への書状を持ち函館へ行くことになつた。

使者となつて出發し大野峠まで来ると、昨夜まで戦争をしてゐた様子だ。此處まで来ると案内人の「アイヌ」が急に「旦那私はもう行くのが嫌になつた」と云ひ出してとうとう其處で馬からおろされて終つた。

仕方がないので赤毛布を着て金子は胴巻に入れ「ピストル」を用意して一見旅商人風に見せかけ徒歩で道を急いだ。

註 赤毛布を手拭で首に巻きつけ、丁度「インパネス」のやうな格好が當時其處で流行だつた。

途中村の役人と人夫に逢ひ「お前は脱走人ではないか」と聞かれたので、決して左様なものではなく幌泉へ昆布の買ひ出しに行つたのであると押問答している内に持つてゐた「ピストル」を発見され、貳百兩の金子と「ピストル」は奪られて終つた。

それでも榎本氏への書状は奪られなかつたので不幸中の幸ひと思ひ、又道を急いだのだが暫く行くと二股道へ出た。さ、どちらに行つていいやら全く困つて終つた。そこへ丁度運よく一人の若者が来て、「五稜郭」はこつちだと道を教へて呉れた。あまり嬉しかつたのでその若い

男の名前を聞いた處、近くで牛を飼つてゐるものだと答へたのも面白い。吃度牛を飼つてゐると云ふのだらう。考へて見れば親切で氣持のよい男だつた。

漸く五稜郭へ辿り着き、開陽丸の機関長をしてゐた朝夷健次郎君に面會して使の趣を傳へることは出来たが、そのまゝ、五稜郭から出る事が出来なくなつて遂に歸順迄居つた譯である。

其の後五稜郭の一同は方々の大名に預けられたのだが藤堂に預けられたものが一番馬鹿を見たやうになる。と云ふのは、開陽に乗り組んでゐた浦賀の與力の上席、中島三郎助と云ふ人が津輕陣屋を守つてゐた時に寄せ手の藤堂勢をひどい目に逢わせたので、その恨みがあつたからだと思ふ。中島氏はこゝで親子共戦死した。確かこの人は開陽の砲術長であつたと記憶してゐる。

そこで我々仲間は一時函館の寺院に入れられ毎日握り飯に梅干と澤庵で三週間暮した。それから御上より當地で引取り人があるなら渡してやると云ふことで、幸ひ私は親戚の者が大和船の船長をして當地にゐたので、これに依頼して引き取つてもらひ、しばらくして和船の水夫に化けて新潟に渡り、佐渡を経て山口縣の上の關へ行き、此處から國元へ船一隻雇ひ切りで行つたのであるが、其の代金が貳兩三分、今の貳圓七拾五錢である。

### 【解説】

〔五稜郭〕…五角形の平面をもつ洋式城塞の意。

江戸幕府が元治元年（1864）北方警備の箱館奉行庁舎として建造した城郭。明治元年（1868）〜2年（1869）幕臣榎本武揚らがここに拠つて新政府軍に最後の抵抗を行った。

〔味噌・醤油〕…『仙台戊辰史』によれば、旧幕府艦隊は仙台発航時に艦隊用物資として味噌2百樽、醤油5百樽を調達していた。

〔インバネス〕…スコットランド北部の地名から）ケープ付きの男子用袖無し外套。幕末から明治初年にかけて輸入され和装用コートとして流行した。とんび、二重回しとも呼ばれた。

〔朝夷健次郎〕…浦賀奉行与力、長崎海軍伝習所3期生（蒸氣方）。榎本武揚とともに蝦夷地に脱走。戊辰の役終結後、新政府に出仕し横須賀海軍工廠に勤務した。なお、戊辰の役當時の開陽丸蒸氣役一等（機関長）は小杉雅之進であつた。

### 【原文】

國元に六ヶ月程滞りし明治二年五月に兵庫に出た。

運送船飛龍丸に一等運転手として乗り組み北海道諸港並に樺太等を航海して十二月品川着直

ちに廻漕丸に乗り組み、伊勢四日市―横濱の定期航海をし、翌明治三年より四年一月迄大阪・神戸―横濱の定期航海をしてゐた。

神戸港を出帆して航海中船客の内海軍士官数名、今井兼輔少佐と伊藤雋吉大尉と乗り會はしたことがある。其の時色々の話のときに幕府にゐた當時の話が出兩君も歸京の上は兵学寮へ行くから貴殿も行かぬか今兵学寮には幕府時代の人が大勢居ると云ふ話なので、品川へ入港して直ぐ下船し、明治四年二月「海軍兵学寮專業學舎」といふ辭令にて入り明治六年同寮練習船椎龍丸の雛型を作製したことにより、特別勉勵の意味を以て金一封を賜つた。

同年六月兵学寮並に乾行艦兼勤を申し付けられ、明治九年六月奥羽御巡幸還御の節、御召艦明治丸に一時乗り組みを命ぜられ、同年七月還御の後、慰勞として宮内省より酒饌料を賜はる。丁度此の時の長官は海軍中將伊東祐磨氏、船長某外国人であつた。明治丸は現在越中島東京高等商船學校の繋留練習船になつてゐる。

私は明治丸が横濱入港と同時に御用済みに付、今度は乾行艦乗組を申し付けられ月俸四拾五圓を給せられ海軍水兵上長に任命された。

明治十一年五月には金剛艦乗組を命ぜられ、同年八月河村海軍郷及花房外務大書記官等も便乗せられて横濱港を出帆し途中岩手縣釜石港並に山田港に寄港して函館に入港した。同地で黒



田開拓長官が乗艦され、これより魯領浦鹽斯德へ渡航、九月四日函館に歸港し、同港に碇泊すること六日間、後小樽、室蘭港に寄りこれより青森に入港した。同地で陸軍少將東伏見宮殿下が御乗艦遊ばされ岩手県大槌港で附近を測量し歸路宮城縣東名港で御上陸あらせられ、十月七日横濱に歸港した。

【解説】

〔明治二年五月に兵庫〕…明治三年五月の誤り。  
 〔船長某外国人〕…R・H・ピータース。明治丸は明治8年(1875)初頭イギリスのグラスゴーを出港し日本に向かったが、その時の回航船長がピータースで、明治15年2月28日に退職するまで明治丸船長を勤めた。回航時のピータースの月額は310円、一等機関長(機関長)W・G・カロメンは285円であった。ちなみに、当時の警視庁巡査の月給は10円(一等巡査)〜4円(四等巡査)であった。  
 〔乾行〕…木造内車(スクリュー)船、150馬力、3檣バーク、排水量523トン、原名「ストルク」。イギリスのリバプールで建造。元治元年(1864)鹿兒島藩が長崎で購入。  
 〔金剛〕…鉄骨・木造装甲、レシプロ1軸スクリュー船、2,035馬力、ダブルトップスルスクーナ(咸臨丸同様の帆装)。1875年(明治8年)9月イギリス・ハルのアール

ス社で起工、1878年1月就役、同年4月横浜に回航し5月に日本海軍に編入、1909年(明治42年)7月除籍。

【原文】

明治十二年英国海軍艦長「リヤデット」氏所藏の運用書一部を献納したので海軍省より賞状を賜はり、同年六月兵學校御雇の英国教師が満期で歸國したので同校生徒教授の爲め乾行艦乗組兼兵學校運用課勤務を申し付けられ、直ちに運用課第三號生徒の教授を命ぜらる。明治十三年本務の餘暇を以て、芝新錢座町攻玉塾内の商船學校運用課甲號生徒を教授し又同塾に於て乾行艦五拾分の一の雛形を製造した。

同年八月兵學校運用課第二號生徒の教授を命ぜられた。此の時の生徒諸君の内に、加藤定吉、山下源太郎、名和又八郎の三氏は大將に出世せられ石橋甫、森義太郎の兩氏は中將、大城、荒川兩少將其他大佐數名あり。

つまり私は戦争に敗けてそれから暫くの間商船で方々を乗り廻し、明治四年一月に現在海軍軍醫學校になつてゐる築地の兵學寮に出て若い海軍士官の卵とも云ふべき人達に艦船の操縦法を自分の経験で教へたのである。

其の頃は軍艦に詳しいものは先ず幕府の者達で、各藩でも多少心得のあるものはあるにはあつたが、佐賀藩位で他は大したものではなかつた

と思ふ。

其處で私は專業學舎といふ辭令を貰つたが、要するに専ら實地の方を司るといふ意味なのである。その役をしたのは私一人であつた。

運用課長も實地(其の頃毎年海軍始の時は天皇陛下の御前で、前述の雛形椎龍丸で運用術實習を天覽に供した)のことになると大概私が相談に與つたものだつた。其の後英国から參拾四名の教師が來て教へてゐたもので、齋藤實大將のクラスはシツプスネームより英人に習つた級であつた。

加藤定吉、山下源太郎、名和又八郎の三大將「クラス」は最初から日本人教官にのみ教授されたもので、此の人達を私が受け持つことになり、其の人数は貳拾七名であつたが、外に英人教師の息子で「ハムモンド」と申す少年が一名居り、この少年には實地を教へるに差支なかつたが名稱等は先方の方がお手のもので、これには全く閉口した。

明治十六年十月海軍兵學校卒業

海軍大將男爵 加藤定吉

昭和二年九月五日 薨

海軍少將 大城源三郎

昭和七年二月二十五日 卒

同 大尉 瀨之口覺四郎

明治二十七年九月十七日 戦死

同 大將男爵山下源太郎

昭和六年二月十八日 薨

○同 大佐 川合昌吾

同 大佐 矢代由徳

明治四十一年四月三十日 公死

同 大佐 宇數甲子郎

昭和二年十二月五日 卒

同 中將 仙頭武央

大正八年十二月十二日 卒

○同 中將 石橋 甫

同 中將 森 義太郎

昭和四年六月二十四日 卒

同 少將 廣瀬勝比古

大正九年十月二十日 卒

同 少尉補 澤田友次郎

明治十八年五月十七日 死

同 少將 西山保吉

大正二年十月十九日 卒

同 大尉 岡部 鋤造

明治二十五年十一月卅日 公死

同 大佐 中川重光

昭和八年三月二十八日 卒

同 大尉 深川喜文

明治三十一年一月廿四日 公死

同 大將 名和又八郎

昭和三年一月十二日 薨

同 少將 奥宮 衛

昭和八年一月七日 卒

同 大佐 淺羽金三郎

明治三十七年九月十八日 戦死

同 中佐 山村彌四郎

明治三十七年六月十五日 戦死

同 少將 荒川規志

昭和九年十二月一日 卒

○同 大尉 中村健次郎

同 大尉 杉田秀一郎

明治二十六年二月三日 死

同 中佐 三戸與十郎

昭和六年八月十二日 卒

同 少尉 堀 秀房

明治二十三年一月九日 免官

同 中佐 遠山政行

明治四十一年六月四日 卒

同 少尉補 西田四郎次郎

明治十八年一月二十九日 死

○印現存者

外にエフ・ダブルユー・ハモンド英国

主計中佐は無事

【解説】

〔攻玉塾〕：文久3年（1863）近藤真琴まことによつて芝新銭座（現港区浜松町1丁目）に創立された数学・オランダ語・航海術などを教授する蘭学塾で、海軍および商船と関連が深かった。「攻玉」とは詩経の「他山の石、以て玉

を攻くべし」を引用したものである。現在の攻玉社。

【原文】

私は艦船運用のことを専ら教授したので、その頃は現代と異なつて號令と云ひ、何から何まで英語を用ひたもので、私もこれには少なからず困らされたものだ。

最初生徒は各藩から拔擢されて出て来た連中で二十才前後の秀才揃ひ、然もはち切れるやうな元氣横溢の人達ばかりであつたので私も大變愉快であつた。

山本權兵衛、日高壯之丞兩大將は第一期生で山本さんは何しろ其の頃から異彩を放つてゐた。大體鹿兒島の風は學生でも先輩でも分け隔てなく一緒になつたものであるが、山本さんは時の海軍卿（現代の海軍大臣）であつた川村純義參議（後、海軍大將）の處などへも、どんどん出張つて行くと云ふ幅利きで、なんでも川村海軍卿に直接談判して七名程「ドイツ」へ留學させることにして貰つたと云ふことを聞いた。

何しろ総理大臣を二度までやられたのであるが、一度引退すると、政治上には殆んど口を利かれないのは全く感心の至りである。

夫人も世人に傳へられる通りの立派な御婦人であるが、公の席には滅多に出られず、御子さん達を立派に教育されたのは全く我々の敬服す



べきことだと考へる。

私は四、五年前に銀座の某支那料理屋に昔私の受持つたクラスの生徒さん達に招待されて大いに懐舊談に花を咲かせたことがある。

その時出席されたのは加藤定吉、山下源太郎、名和又八郎の三大將、石橋甫、森義太郎兩中將、大城、荒川、西山少將、宇敷甲子郎大佐の諸氏であった。(現存同クラスでは石橋、川合氏外一名のみ御健在) 私としては全く光榮の至りて昔を忘れられない各將等の厚誼に感激した次第であります。

〔解説〕

〔参議〕…明治2年(1869)太政官に設け、大政に参与した官職。明治4年以降は太政大臣・左右大臣の次で、正三位相当。明治18年(1885)廃止。

〔原文〕

話は前に戻つて私は海軍の任務を辭して  
 「明治十四年十月六日登録 甲種船長免状」  
 明治二十九年法律第六十八號船舶職員法二依  
 リ之ヲ授與ス  
 明治三十一年二月二十二日通信大臣男爵末松  
 謙澄  
 右の免状を持ち直ちに日本橋區小網町三丁目  
 に在る風帆船會社(社長海軍大佐遠武秀行)の

回漕丸の船長となり、肥前唐津より海軍省の石炭を横須賀に運搬することに従事した。

此の航海は非常に難航海で、これには色々話したいこともあるが餘り長くなるので略することにする。後、同社の謙信丸に乗り組んだ。本船は三本「パークリツグ」船である。これで品川灣より函館に行き、此往復日数は二十一日間、積荷は大概昆布、鯨粕で運賃は參千貳百圓位で先づ上等であつた。次航は八月十日に品川を抜錨して青森縣の八ノ戸字鮫港に着し、同港で錨を積み、往復運賃參千餘圓、此の日數廿八日間であつた。第三次航海は九月八日品川を出帆十六日に南部嶽ヶ崎に寄港した。此航海中大きな鮫を釣り上げた。

此の鮫の長さ貳間、胴の丸さ三尺五寸もあり、航海中色々の料理をして、蒲鉾或は味噌漬などもつくつた。此の航海の日數は二十一日間、同二十六日函館を出帆、十月一日暴風雨のため房州館山に寄港、四日品川着、この復航は八日と十四時間、第四次航は品川・函館間で十月十七日に品川を出帆して二十一日房州館山に寄港し、二十三日同港を出帆、同三十日南部嶽ヶ崎に寄港、十一月三日に同港を抜錨し、渡島の國「三尻岸内」灣に向つたが、ここは恵山崎の近傍で日々の強逆風の爲め止むを得ず使を函館支店へ出し、直ちに汽船福山丸に曳かれ同十時頃着、直ぐ積荷して十二月八日同港を出帆し、

十八日に品川に到着した。第五次航は品川、仙台、折り濱間で十二月二十一日品川灣を出帆、航海日數及び積荷日數共十一日間。

扱茲に一寸陳べて見たいのは舊三菱社が西南戦争時代から例の大隈さんなどの後援者のあつた關係で、海運方面の仕事を一入占めをしてゐたことがある。ところが長州のひとで品川彌次郎と云ふ方が内務大臣時代に半官半民の共同運輸會社と云ふものを創立して、英國へ山城・近江・薩摩・長門・播磨・河内等の新船を注文し、これが三菱會社と對抗することになった。社長は薩摩の森岡と云ふ人がなつて盛んに活躍したものだ。

而してこの兩會社は競争して、よくあるところの共倒れとなり、後には兩會社が併合した。これが現在の郵船會社の始めである。

私も風帆船會社時代の株を數拾株持ち船員であると共に株主であつた譯だ。

〔解説〕

〔三本「パークリツグ」…3檣パーク帆装(帆船日本丸は4檣パーク)  
 「長さ貳間、胴の丸さ三尺五寸」…二間(約3・64メートル) 三尺五寸(1・06メートル)

〔原文〕

それから私は僅か百三十餘噸の汽船嬌龍丸舊

名「ケブロン」で根室港（北海道東端）を起点にして上半ヶ月間は擇捉・得撫「斜古丹島」、下半期は國後並に北見國網走迄に到る航路に従事したが、此の方面の航路は全く私が最初に開いたものだ。（共同運輸會社時代）

又それから後同社の玄武丸に乗組み北海道を航海中幌泉に昆布の積取りに行き碇泊中、北海道長官湯地氏の案内で内務大臣山縣有朋氏、外務大臣井上馨氏外官吏大勢、中には今も健在の三井物産の重役であった益田孝氏もまぢり、方々を廻つた。湯地氏は非常な剣幕で直ぐ釧路へ向け出帆せよと申されたが、私は承知せず、函館支店の命のなき時は斷然出帆出来ないと言つた。その譯は荷主との約束で積取に來て其の日に丁度一週間も風のなざるのを待つてゐる次第なので翌日が好天気でも出帆せぬと堅く斷つたのだが湯地氏も色々と申し出たので、それならば荷主の苦情も引受け又私の身も引きうける約束で、直ぐ其の夜釧路へ向け出帆した。朝釧路へ着いて間もなく本船は出帆し幌泉で荷物を満載して函館へ入港して、この趣を支店長に報告したことをきおくしてゐる。

其の後横濱と伊勢の四日市との定期航海をし、後前述の持株を他に譲り渡し、それにて長崎村と云ふ所で牧場を始めたがうまく行かず、遂に之を親戚の者に托して、中越汽船會社々長後井順造氏の小菅丸に乗つて日本中を廻航し、

二ヶ年後これも止めて北海道函館汽船會社の支配人となつた。

此處にある内に明治二十六年の暮に友人五名と共に相談して汽船を買ひ求め之を五洋丸と名附けた。この船長には伊藤定弘氏を聘した。そして翌二十七年日清戦争が勃發して意外の利益を得た。

其の後馬山浦事件でゴタゴタしていた時、友人三名で拾五万五千圓の勝野丸と云ふ貳千貳百噸の汽船を買つた。此の仲間は谷道、佐野と云ふ人であつたが、名義が私になつてゐたので、先年の反動で大損をした。何しろ横濱・門司間の一圓の石炭運賃が五拾貳錢と云ふ大暴落をしたのだから堪らない。

私は共同運輸會社時代には主として北海道ばかり航海して居た。確か明治八年頃と思ふ榎本武揚氏が露京に全權公使に行つた時に千島と樺太とを交換する事になつて、「シムシリ」にゐた「ロシア人」五十人程は日本に歸化することになつたので、私は百三十噸ばかりの船でそれを受け取りに行き、根室に近い「斜古丹」島に移動した事がある。その時彼等に米等を與へたが一向に食べない。何しろ彼等は「オットセイ」とか「アザラシ」ばかり食べているので、やはり口に合はないと見える。

毎月いろいろの物を持つて行つてやり、牛などは時々持つて行つてやつたものだ。牛を陸揚

げするには船はなし止むを得ず海中に投込み泳ぎ上らせた。

## 〔原文〕

渡邊清次郎翁米壽祝賀會 發起人の一員

尾山生投稿

渡邊翁は明治の初年海軍水兵上長として兵學校にあり運用術の實地を教授せられたる、當時優秀の經驗者なり。現時に於ける我戰友中翁を知る極めて少なかるべきも、斯界の功勞者として永く記念すべき恩人なり。吾人同志は左掲案内狀に示すが如く五月二十日其の米壽祝賀會を催したり。

◎當日發起人代表者は左の如く傳言せり

前略 古來人生五十と稱するも、先ず六十一歳の本卦回以上を以て老人とする様です。翁は疾く二十七年前に此の齡を過ぎ、尚十八年前には古稀となり、今や正に米壽を迎へられたのであります。一般世間に老齡の人は鮮くはありませんが動もすれば病床に親しみ、然らざるも心神疲憊して退嬰に傾き活躍に耐へない人が多いのです。然るに翁が今尚壯者を凌ぐの銳氣あるは洵に欣ぶべく羨むべきではありませんか。此の勢を以て押せば百歳の壽を完ふせらるゝは決して難くはないこと、思ひます。希くは吾人は各々健康に注意を拂ひ翁に肖り百歳の賀宴に列

することを得たいものであります。

次に阪本男爵は來賓總代として翁の經歷を叙し最も周到懇篤なる祝辭を述べられた。最後に翁は謝辭を述べ様とせられたが歎喜の餘萬感胸に迫り、言辭を發する能わず親戚某をして代讀せしめられた。

其の末尾に左の數語あり

諸君の御厚意に酬ゆるため、私が今日迄實踐し來りたる健康保持の方法を披露し御參考に供します。即ち第一は毎朝早起、戸外散步勵行、第二は成るべく物事に屈託せぬ事、第三は早寢の實行であります。

蓋し吾人後輩に長生の要旨を示唆せられたものであらう。兵學校に於て翁の教授を受けたるは明治六年よりの第三號と十二年よりの第七號と二級である。第三號の生存者は齋藤實、阪本俊篤、寺垣猪三、岩崎達人の四氏第七號の生存者は石橋甫、荒川規志、川合昌吾、中村健次郎の四氏と思ふ。當日齋藤子爵は公務に妨げられ參回されなかつたが數日前翁の米壽を恭祝するとして特に左記の揮毫を贈られた。

若蘭之秀 赤松之茂

其壽何高 其澤何長

翁は無上の光榮として深く其厚情に感激し之を模寫して臨席者一同に頒布せられた。

因みに翁は嗣子を得られず、令甥海軍大佐渡邊眞吾氏を養嗣子とされたが數年前其の長逝に

逢われたことは寔に同情に堪へない次第である。

【解説】

〔若蘭之秀 赤松之茂 其壽何高 其澤何長〕…「若い蘭のように（香は）秀れ、赤松のように（青々と）茂っている。その壽の（山は）なんと高く、その沢（谷間）のなんと長いことよ。」渡邊清次郎の人生を齋藤子爵が漢詩としたもの。

〔海軍大佐渡邊眞吾〕…日清戦争（明治27～28年、1894～1895）の黄海海戦で勇名を馳せた。（終り）

【原文】

不肖清次郎世ヲ憚ルコト茲ニ八十有八年顧ミテ何等疾シキコトナカリシヲ誓フト共ニ又何等報ズルコトナカリシコトヲ恥ズ。然ルニ此ノ企テアリ死ヲ以テ謝スルモ尚足ラザルヲ憶フ。今ヤ時局ハ重大、邦家非常時ニ會ス。何等盡スベキ力モナク施スベキ策モナク徒ラニ殘骸ヲ曝シテ知友ニ辱ヲ致スノミ頗ル慚愧ニ堪ヘズ。茲ニ今回ノ此ノ機ヲ最后トシテ永久ニ諸公ニ別レ生ケル屍トシテ余生ヲ送ラムトス。希クハ老生ノ微衷ヲ酌ミ御許容アラムコトヲ。

昭和九年三月

渡邊清次郎

【渡邊清次郎】

清次郎は弘化4年（1847）11月25日、塩飽諸島・本島・泊浦で生まれた。

安政7年正月13日（1860年2月4日）咸臨丸は、日米修好通商条約批准書交換のためアメリカ首都ワシントンに向かう遣米使節を乗せた軍艦ポーハタンの随伴艦として、北米サンフランシスコに向けて品川沖を出航した。同年3月3日、大老・井伊直弼は桜田門外で暗殺され、同3月18日「万延」と改元された。

咸臨丸は5月6日（1960年6月24日）品川沖に帰航した。

この5月、14歳の清次郎は本島・泊浦の人たちと水杯を交わし、幕府軍艦蟠龍丸に乗艦のため勇躍江戸に向かった。

『渡邊清次郎回想録』は昭和10年、清次郎89歳のときに語ったものをまとめ、昭和12年10月に非売品として刊行したものである。

清次郎の従兄にあたる石川政太郎は、咸臨丸に帆仕立役として乗船し『安政七申歳正月十三日日記』を手記した。その内容は咸臨丸の往航について航海日誌風に記したもので、水夫の書いた唯一のものとして、その意義が認められているものである。政太郎は書も読め、御家流の字も能くしたので「日記」はやや読み難く、さらに方位、帆の名稱などはオランダ語の発音のままをカタカナで記しているので難解な部分がある。





渡邊清次郎の甲種船長免状（渡邊清次郎回想録）



渡邊清次郎（渡邊清次郎回想録）

多い。

『渡邊清次郎回想録』は、昭和10年頃の言葉遣いであるから、文章は平易で理解しやすい。その内容は、清次郎が関与したいろいろな事件―千秋丸による小笠原島航海。オランダより回航の軍艦開陽丸の受け取りのため築地の海軍操練所に入所し訓練を受けたこと。江戸薩摩屋敷放火事件。開陽丸と薩摩藩軍艦春日が砲火を交えた阿波沖海戦前夜の春日に対する偵察行。15代将軍徳川慶喜公の大坂城脱出と江戸回航の状況。上野彰義隊の悲惨な状況。旧幕府艦隊の江戸湾脱出と遭難、開陽丸の舵折損と応急仮舵。開陽丸の江差沖における破船沈没。室蘭の澤開拓奉行の命により箱館・五稜郭への隠密行。五稜郭陥落・戊辰の役の終結など―の裏話が多く、一般にはあまり知られていない話題を提供しているところに特徴がある。

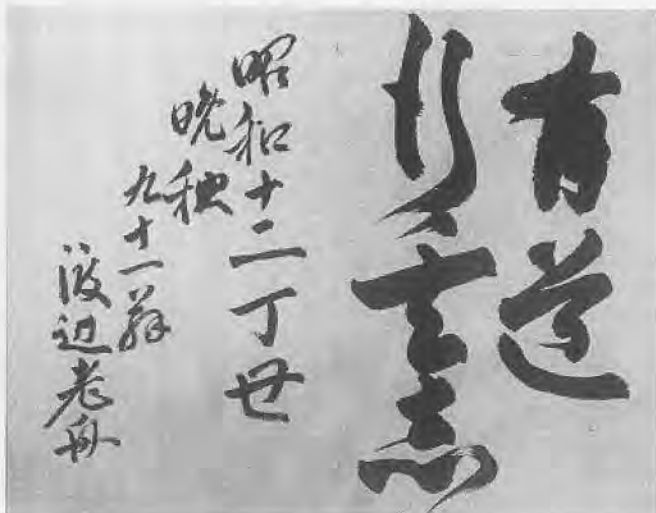
明治2年5月一等運転士として商船に乗ったが、航海中に知り合った今井・伊藤の2海軍士官の推挙により明治4年「海軍兵學寮專業学舎」に任用された。明治9年（1876）には明治天皇の奥州・函館御巡幸の御召艦明治丸の乗り組みを命じられた。下船後、軍艦金剛や乾行に乗艦した。この年、海軍兵學寮は海軍兵学校と改称された。

清次郎は明治14年（1881）に、11か年にわたる海軍兵学校の職を辞した。この間に彼の

薫陶を受けた生徒のうちには、のちの海軍大将山本権兵衛、同日高壯之丞、同加藤友三郎、海軍中将石橋甫、同森義太郎、海軍少将大城源三郎など錚々たる人材が多数おり、郷土史家の真木信夫は渡邊清次郎を「日本海軍育ての親」と評価している。

【おわりに】

平成24年7月3日から同月31日まで、東京海軍大学明治丸ミュージアム（越中島キャンパス）で大学が所蔵する貴重な文化財・資料から選出して、企画展示「蔵出しお宝展」が開催された。その中に渡邊清次郎の昭和12年11月揮毫の墨書



渡邊清次郎の書

が展示されていた。その説明文には「日本最古の船長の一人、幕府軍艦開陽丸、明治丸等に乘船」とある。

有道

行其志

昭和十二丁丑

晩秋

九十一翁

渡辺老舟

書は「道あり、其の志を行う」と読む。

この書は、清次郎が想い出の明治丸を東京高等商船学校に訪問したおりの墨書であり、彼は翌昭和13年4月18日東京で92歳の生涯を終えているから、渡邊清次郎の絶筆と思われる。

—完—

【参考文献】

ロマンの海に漕ぎだそう…橋本進、舵社、1990

物語・瀬戸内航海記（旅客船No.202）…橋本進、（社）日本旅客船協会、1998

武士の家計簿…磯田道史、新潮社、2003  
日本の貨幣の歴史…滝沢武雄、吉川弘文館、1996

咸臨丸還る…橋本進、中央公論新社、

2001

咸臨丸、大海をゆく…海文堂、2010

幕末軍艦咸臨丸（上・下）…文倉平次郎、中央公論社、1993

中央公論社、1993

榎本武揚…加茂儀一、中央公論社、1988

長崎海軍伝習所…藤井哲博、中央公論社、1991

1991

日本近世造船史（明治時代）…造船協会、1911

1911

航こう—榎本武揚と軍艦開陽丸の生涯—…網

淵謙鏡、新潮社、1986

【お詫びと訂正】

「渡邊清次郎回想録」について（前編）（No.260）に誤りがありました。お詫びして訂正をお願いします。

①27ページ、2段目

〔拾四歳の5月〕…文久元年（1861）5月のこと。14歳になった渡邊清次郎は幕府軍艦に乗艦のため江戸に向かった。

②30ページ2段目6行12字目、11月を10月に。

NKSグループ

万が一のことがあったら、すぐチカラになってくれる。大きな安心感で守ってくれる。頼もしい存在です。



さすが、わたしの保険。  
ニッポン、コウア、ソノボ。

あなたを全力で支える。日本興亜損保



日本興亜損保は、エコファースト企業です。

ECORATT



Eco-Net約款キャンペーン!! 実施中。詳しくはホームページへ。

〒100-8965 東京都千代田区霞が関3-3 日本興亜損害保険株式会社 03-3593-3111(代) www.nipponkoa.co.jp LC11-0003